

## 保護者・保育者・大学専門機関を繋ぐ指導体制について —保育園における個別指導実施を通して—

佐藤 智恵<sup>1</sup>・真鍋 健<sup>2</sup>・七木田 敦<sup>3</sup>

### The study about cooperation of parents, caregivers and university, for children with special needs

— Individualized Teaching Performance in a Day-Care Center —

Chie SATO<sup>1</sup>, Ken MANABE<sup>2</sup>, Atsushi NANAKIDA<sup>3</sup>

**Abstract** : This study aims at reviewing the effects of the cooperation of parents, caregivers, and university when a leader belonging to a university performs individual teaching in a day-care center to which a disabled child belongs. As for research method, I analyzed the individual teaching record and made a semi-structured interview with the caregivers. As a result, it was suggested that the teaching system in a day-care center has a lot of opportunities in which the three meet and lets them make interactive communication easily through everyday scenes, so that cooperation can be performed more smoothly than out of the day-care center. In addition, it was considered important for them to know the others' teaching and child-care in each position, become able to be consulted easily, be aware of the importance of everyday living, accumulate and share the records for performing cooperation.

**Key Words** : cooperation, children with special needs, day-care center, parents,

### 目 的

障害のある子どもたちの保育を考える際、専門家との連携は必要不可欠なものである。これまでも、巡回相談による支援（浜谷，2005）や、特別支援学校のセンター的機能による保育所・幼稚園への支援（安塚ら，2007）などが行われている。また、梅崎ら（2006）は、大学と幼稚園の連携による職場内研修を進めていることを報告している。このように一言に連携といっても様々な形式が存在する。このような中、本研究においては、個別指導を通じた大学と保育園と保護者の連携について焦点を当てる。

通常、障害のある幼児への個別指導は、療育施設や医療機関、大学の相談室などで行われている（若子2008）。この場合、幼児は週に1回、または2週間に1回など決められた日時に保護者とともに療育施設や大学などを訪れ指導を受

けている。このような個別指導では、対象児の発達に即した専門的な指導が実施されており、幼児の発達を促す効果があることは周知の所である。

このように保育所幼稚園と療育施設を併用で利用する場合、集団生活の場である保育所幼稚園と、個別指導場面とでは、幼児の姿が異なっていることが考えられる。そこで、個別指導の指導者（以下、指導者と記す）と保護者だけの連携でなく、保育所幼稚園の保育者を含めた3者での連携が必要である。

保育者と指導者の連携の方法としては、まず1点目としては、保育者が個別指導の場を訪問する、或いは、指導者が保育所幼稚園を訪問するなど、それぞれの場における幼児の姿やそれぞれの指導への理解を深めるということが考えられる。2点目として、保護者が仲立ちとなり、それぞれの場での幼児の様子を保育者・指導者に伝達するということが挙げられる。ところが、これらの方法ではスムーズな連携が行われない可能性がある。1点目のそれぞれの場を訪問す

1 神戸親和女子大学  
2 広島大学大学院  
3 広島大学教育学研究科附属幼年教育研究施設

るというケースでは、自らの指導・保育場面では見られない幼児の姿を見ることが可能となり、それをそれぞれの指導・保育に活かすことができるといった効果が考えられる。しかし、保育者と指導者のそれぞれの指導時間帯や勤務の関係から頻繁にお互いの施設を訪問することは困難な場合が多い。一方、保護者が仲立ちとなり連携を行う場合は、前述のケースよりも実施が容易であると思われるが、それぞれの場の様子を伝達する保護者への負担が大きく、また保育者・指導者それぞれの意図が相手に上手く伝わらないことも考えられ、どちらのケースにおいても情報を共有することの困難さが存在すると言える。

これまで、障害児の個別指導は療育機関や大学などで実施することが「当たり前」だとされてきた。これは、障害児に対する指導は、障害児への対応に関する知識や技術が蓄積された療育機関や専門家に任せた方がよいという考えから生じたものであろう。しかし、障害のある幼児が、その生活の場である保育所・幼稚園でしか見せない姿があることも考えられ、生活を共にしている保育者だからこそ理解している幼児の姿もあると思われる。幼児が長時間過ごしている保育所幼稚園での生活に目を向けた連携を行うことは、幼児や保護者、保育者への支援となるのではないか。保育者と保護者と指導者の連携を考える際、これまでの療育の在り方から視点を変え、対象児の在籍する保育所幼稚園において個別指導を実施することへの検討も必要だと思われる。

そこで、本研究においてはこれまでの療育機関や大学内における指導形態を変化させ、大学に所属する指導者が対象児の在籍する保育所幼稚園に向いて個別指導を実施し、保護者・保育者・大学の3者の連携について、その効果について検討を行うことを目的とする。

## 方法

### 1. 対象児と参加者

対象児は指導開始時、3歳2か月のダウン症女児A児である。個別指導への参加は、個別指導の指導者（大学院生2名・大学教員1名）、A児の担任保育士1名、保護者が参加した。担任保育士と保護者への参加は、指導者からの依頼により実現した。担任保育士は、担任2名のうちどちらかが交代で参加した。

### 2. 指導について

個別指導は、A児の在籍する保育園内の子育て支援室にて、月に2回の頻度で実施した。1回の指導時間は15時30分から16時30分の約1時間行った。子育て支援の部屋は、園長や主任が事務を行う事務室とつながったオープンスペースとなっており、保育士も出入りのすることの多い場所である。

指導方法は、対象児が幼児であることから、指導における特定の介入方法というものは定めず、A児の興味関心を察知しながら、流動的な指導を実施することとした。個別指導の概要を表1に示す。

表1 ある日の指導の流れ

|                                    |
|------------------------------------|
| 1. はじまりのあいさつ                       |
| 2. お名前呼び                           |
| 3. サーキット（平均台の上を歩く・紐をまたぐ・トンネルくぐりなど） |
| 4. お買い物のごっこ                        |
| 5. 絵本                              |
| 6. おしまいのうた                         |

### 3. 研究方法

A児が在籍する私立保育園において実施した個別指導や観察などの記録を基に、保護者・保育者・大学の3者の連携について分析を行う。また、指導開始後1年半後に、担任保育士など3名の保育者に対して半構造化インタビューを実施し、保育園での個別活動における連携の効果について検討を行う。

## 結果

### 1. 指導前後での相談

指導前後の時間で、担任保育者や母親と日々のA児の様子と個別指導時にみられた様子の情報交換を行った。

保護者からは、A児の発達上気がかりなことや就学についての不安、しつけに関する事柄などの相談も話された。障害があることから生じる悩みもあれば、一般的な子育て上の悩みもあった。

指導者らは、指導前の時間にA児のクラスでの様子を毎回10～15分ほど観察しており、担任保育者とはその時に話すこともあった。集団におけるA児の姿の観察から、その興味関心を個別指導の内容に活かしたり、個別指導時の内容を保育実践に活かすなど、個別指導と保育実践における往還があった。指導者は、保護者や保

育者からの話を聞くことで、個別指導時にみられたA児の行動についてより理解することが可能となった。また、保護者や保育者にとっては、個別指導における指導者ねらいを知る機会となったと思われる。指導者と保育者、指導者と保護者、保育者と保護者というそれぞれの関係で話をすることもあれば、指導後に3者が顔を合わせて話をすることもあった。5分足らずの時間ではあるが、A児が楽しく過ごした指導後は、保育者も保護者も指導者もリラックスしA児のことを話し合うなど、気負わず自然な流れの中で連携が行われた。以下、指導者の記録より連携について書かれた箇所の一部を記載する。

#### 保護者・指導者の連携についての記述

3月18日 お名前呼びの歌について。母親より家庭でも口ずさんでいることが話された。こちらはA児の様子から、少し飽きているのかなと考えていたのだが、家庭では人形を並べてA児が先生役になり楽しんでいるらしい。引き続き行うことにしたい。歩く活動は、途中で止めてしまうが、人形に関心を持っていたので身体部位を知るという活動へと内容を変化させた。母親にもそのことについて指導後に説明を行うと、そういった柔軟な対応がA児には必要だと感じると理解を示していただいた。

#### 保育者・指導者の連携についての記述

4月24日 担任のC先生と話す。新しいクラスや担任にも慣れた様子だということ。言葉を使って自分のイメージの世界で遊んだりしている。「オイシイ、オイシイ。あー全部食べちゃった」など言っているらしい。音楽に合わせて体を動かすことを好むので、今日のような活動は楽しんでいると思う、クラスの中でもできそうなのでまたやってみようということであった。

#### 保育者・保護者・指導者の連携についての記述

6月24日 母親、C先生と話す。クラスの中でA児と一緒に過ごすことが当たり前になってきているらしい。頑固な所も見られ始め、普段はそうでもないが、自分が「これ」と思うものはひかない所があるらしい。C先生は、そういう部分をとても頼もしく思うとのことであった。家庭では、頑固な部分がとても多いらしい。C先生からのお話を母親は笑って聞いておられた。前回、今回ともに個別指導場面においてもA児の頑固な部分がみられるようになった。自分が出せるほど慣れてきたのかと思う。

#### 2. 保育実践の観察

指導開始前の10～15分程度の時間、指導者はA児の在籍するクラスを毎回訪れ、集団でのA児の様子の観察を行った。また、個別指導時以外の時間帯にも、時には保育園を訪れ、様々な場面でのA児の姿の観察を行った。クラス訪問では、他児らと一緒に活動する様子を観察したり、担任保育者から最近の様子を聞き、個別指導時にはみられないA児の姿を知る機会となった。集団での様子を知ることによって、個別指導に活かすことが可能になった。それは、A児にとっても日常生活と個別指導とのつながりのあるスムーズな指導になったと考えられる。

#### 3. 連絡帳

連携をスムーズに行うツールとして連絡帳を作成した。連絡帳は、保護者が指導に同席するために、その日の指導内容や出来事の伝達というよりは、A児の成長記録としての意味合いを持たせることにした。左側ページにその日のねらいなどを記述した指導案を記載し、右側に指導者、保護者、保育者が記述できるようなコメント欄を設けた(写真1)。そして、連絡帳は、指導者から直接保護者に手渡すのではなく、一度、保育者を仲介して保護者に手渡してもらうようにした。これは、指導後すぐ保護者に手渡すと、保育者は殆ど目を通す時間が取れないことが考えられたからである。また、指導時間に参加できない担任保育者にも当日の指導内容を確認してもらい意味もあった。この結果、連絡帳においても保護者・保育者・指導者の3者のやりとりが頻繁に行われるようになった。

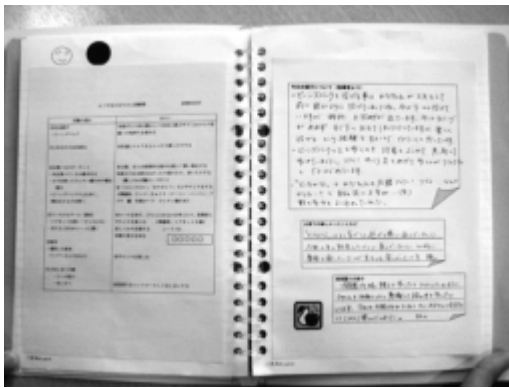


写真1 ある日の連絡帳

#### 4. 担任保育者へのインタビューより

本研究においては、3歳児クラスの担任保育者A、B、主任保育者Cの計3名に半構造化インタビューを行った。実施日は200X+2年1月下旬である。場所は保育園内の職員室で行った。

インタビューより、保護者・保育者・大学の連携について話された事柄を抽出する。

仕事を持っている母親が、仕事を抜けて他機関へ療育に連れて行くのは時間的にも難しく、大変だろうと思う。お迎えの時に、子育て支援室に寄って 個別指導に同席するというのは無理なく行えて、続けられたのではないかと思う。(保育者C)

個別指導で何をしているのかが見えるから、A児の個別指導の時の様子が分かり、お母さんを介して様子を聞くよりも、詳しく分かるのがいい。あと、もう一つの効果として、オープンにすることによって、担任以外の人も子どもの様子に関心が持っているとと思う。(保育者A)

何かA児のためにやりたいなあと思っていても、何をやったらいいのかという不安があったけど、個別指導の様子を見て、「これならできる」とか「こういう風にしたらいんだ」ということを自分自身が理解できた。療育に行くっていうと、どんなことをしているのかよく分からず、自分たちにはできないような気がしてたけど、実際に同席することで「今までに保育の中でやっていることだな」と思い身近に感じる事ができた。個別指導の内容を、保育の中にも活かすことができている(保育者B)。

療育センターだと、行きたくても勤務形態の

都合で毎回見学にというわけにはいかない。そのため、センターと保育園、保護者の連携が上手く取れないこともある。時には、園とセンターの言うことが異なり保護者を混乱させてしまうこともあった。この方法だと、「どうなんだろう?」と心配に感じたことなど、すぐに顔を突き合わせて話すことができ、3者の連携が取りやすい。指導者とも保護者とも気軽に頻りに話ができることで、信頼関係が築けたと思う(保育者C)。

#### 考 察

記録の分析や保育者へのインタビューにより、保育園内において個別指導の実施に関して、保護者・保育者・大学専門機関の連携には以下のような事柄が必要であることが示唆された。

(1) それぞれが指導内容・保育内容を知ること

保育者へのインタビューから、これまで保育者は、療育施設における個別指導に関して、何をしているのか不明に感じていたということであった。毎回の指導を見ることで、個別指導と自らの保育を結び付けることが可能となったと思われる。知る機会の少ないことから、これまで特別なものとして捉えていた療育を身近なものと感じ、自らが行っている保育活動と変わらないものと感じたと話されたことから、指導者と保育者がお互いの指導内容や保育内容について共通理解することが必要であると言える。そのためには、それぞれの指導案の開示や、指導の目標、保育上配慮事項などの説明を、相手に伝えなければならない。その際、専門用語や保育・療育だけで通用する言語の使用は控え、誰もが理解できる言葉で伝えることが必要であると思われる。

またオープンな場所における指導は、担任保育者以外の人も対象児の指導に関心を寄せることとなり、理解が得られたことが明らかになった。これは、障害のある幼児のことを保育園全体で保育をするという意識を持つことにつながると言える。

(2) 3者が気軽に相談できる存在であること

保育者Cの発言にもあるように、保護者・保育者・指導者が日常的に会うことで、特別な日に顔を合わす連携ではなく、3者それぞれが、気軽に相談できる相手となり、情報を共有できる存在となった。これまでの指導形態では、保

育者が個別指導の場に居合わせる事が少ないために、日常の集団生活場面での幼児の様子が、指導者ばかりか保護者にも十分伝わらなかったことが考えられる。3者が同席することで、保護者が抱える不安について、指導者が話す内容に併せて、保育者が集団場面での様子を伝えることで、保護者がより納得し安心できるような場面があるだろう。指導者にとっては、このような連携の中から、対象児の様子をより理解することができ、自らの指導に活かすことができると考えられる。

それぞれの情報を提供し、共有することが可能になるためには、気軽に悩みや不安を相談できる関係が必要である。このような関係の構築は、障害のある幼児を育てる母親や、保育を行う保育者、そして指導者にとっても重要であると言える。

### (3) 日常の生活場面の重要性を意識すること

本研究においては、日常の保育場面の観察を積極的に実施した。これは、個別指導の場面だけを抽出してA児の成長を捉えることはできないと考えたからである。保育場面の観察を行う中で、2週間に1度、1時間の指導時間だけでは知りえない他児との関係や集団の中でのA児の姿を理解することが可能となった。連携を考える際、日常場面の観察、個別指導時の様子、家庭での姿など、様々な場面における対象児の姿を複合的に捉え、「保育者・保護者＝教わる人、指導者＝教える人」という図式でなく、それぞれが対象児について教え教わるという双方向的な関係が構築されるべきである。またその中で保育者や指導者は、それぞれの専門性を活かし、保護者の不安や悩みを共に考えたり、アイデアを提供したりする役割を担うことが求められる。一方向的に関わりではなく、このような双方向的な方法で連携を行うことが重要になると思われる。

### (4) 指導記録の蓄積と共有

個別指導を行う際、指導者は指導案や記録物を作成している。これらの記録物は自らが蓄積してだけでなく、保護者や保育者に提示していく必要がある。また、保護者や保育者に対して、どのような指導目標を持って指導を行っているかなどの説明を丁寧に行うことも指導者の重要な役割である。だが、指導の度に指導案や記録を一枚ずつ保護者に手渡していくと紛失

するおそれもあり、記録が蓄積しづらいことが考えられる。そこで、本研究では、連絡帳を使用した。ノートに指導案と記録が蓄積されていくことで、指導内容を説明する際にも、以前の活動時の様子と比較しながら話をしたりすることが可能となった。また、保護者や保育者にもコメントを記入してもらうことで、日常の様子も蓄積・共有していくことができた。このような記録物を、指導者だけが蓄積していくのではなく、保護者や保育者とともに共有することで、連携のためのより効果的な記録物になることが考えられる。

## まとめ

保育園において個別指導を行う際、保護者・保育者・指導者の3者で連携をする効果について検討を行った。その結果、3者で会う機会の多さや、日常場面を介した双方向的なやりとりが行いやすいことから、保育所幼稚園外で指導を行うよりも連携がスムーズに行えることが示唆された。加えて、連携を行うためには、3者がそれぞれの立場で互いの指導内容や保育内容を知ること、気軽に相談できる存在となること、日常の生活場面の重要性を意識すること、記録物の蓄積と共有することの重要性が考えられた。

療育施設のように設備が揃った環境下の指導が効果的であることはもちろんである。しかし、本研究での実施により、通常の保育室での個別指導も十分可能であり、むしろ保育園で実施することでこそ行える連携があることが示唆された。園によっては、このような場所の確保が難しいことも考えられる。それについては、実施日時などの検討や工夫を行うことで実施可能になることもあるだろう。

保護者、保育者、指導者、それぞれにとって、よりよい連携が検討されることは、幼児の大きな支援となると言える。よい連携が行われるためには、「障害児のことは専門家に任せておく」という考えではなく、「保護者にしか」また「保育者にしか」分からない事象があることを意識化し、それぞれが対等な立場で子どものことを考えたり話し合える場にする必要がある。

## 引用文献

浜谷直人 (2005) 巡回相談はどのように障害児統合保育を支援するか：発達臨床コンサル

テーションの支援モデル. 発達心理学研究  
**16 (3)**. 300-310.

梅崎高行・河田将一・三井真紀 (2006) 大学と  
幼稚園の連携による特別支援ができる保育  
者育成の試み (1) 紀要VISIO **34**. 65-71.

若子理恵 (2008) 幼児期における療育の焦点,  
そだちの科学, **11**, 102-106.

安塚洋子・京林由季子 (2007) 特別支援学校の  
障害幼児への発達支援に関する一考察—セ  
ンターの機能による幼稚園・保育所への支  
援を中心に—. 宇都宮大学教育学部 教育  
実践総合センター紀要 **30**. 217-226.